

# 中学生の非行傾向行為と抑うつ傾向との関連について

## — ストレッサーとコーピングからの検討 —

小保方 晶子<sup>1</sup> 無藤 隆<sup>2</sup>

本研究は、中学生2743名に質問紙調査を行い、中学生の非行傾向行為と抑うつとの関連について、ストレッサーとコーピングから検討を行なった。日常生活のストレッサーは、非行と抑うつの両方と関連していたが、非行があり抑うつが高い子どもは、非行があり抑うつが低い子どもより、「先生ストレッサー」「親ストレッサー」が高かった。「学業ストレッサー」は差がみられなかった。コーピングは、「積極的対処」「サポート希求」が低く、「逃避・回避的対処」が高いことが明らかになった。次に、ストレッサーが非行と抑うつの各々に対して、どの程度影響を与えているのか、共分散構造分析を用いて、直接比較を行った。その結果、日常生活のストレッサーは、「非行傾向行為」より「抑うつ」に対しての方が影響力が強いことが明らかになった。また、「ストレッサー」から「抑うつ」に対する影響力は、男子と比較し女子の方が強かった。さらに「ストレッサー」から「非行傾向行為」の影響力は、1年生男子と3年生女子が、他の集団と比較し弱いことが明らかになった。

### 問題と目的

中学校生活における問題行動に非行がある。行動上の問題として、非行傾向は、中学校で特に問題となっているものである。また、非行総数中の6割から7割以上といった圧倒的多数が、万引きや自転車盗といった軽微な犯罪を中心に遊び感覚でなされる「初発型非行」である。非行は深化していく(緑川, 1999)との指摘もあり、非行の芽を摘むためにも、中学生の非行傾向について考えていくことは意味のあることだと思われる。本研究では学校に通っている中学生を対象とし、中学校生活の中でみられる行為に焦点をあてることから、タバコを吸うなどの行為を非行傾向行為と名づけ検討する。

近年、中学生の問題行動、学校不適応とストレスとの関連を検討した研究が多く存在し、中学生が経験するストレッサーと問題行動、学校不適応は何らかの関係があることが明らかにされている。ストレッサーに対する反応には、不機嫌・怒り、抑うつ、無気力、不安、攻撃性などがある(三浦, 2002; 岡田, 2002)。

Lazarus & Folkman (1989)によれば、個人の心理的ストレス過程は、ストレッサー、認知的評価、コー

ピング、ストレス反応の4過程から構成されている。つまり、個人があるストレッサーを経験した場合に、その出来事が自分にとってどの程度、脅威的であるか、影響力があるか、あるいは対処可能なものであるかなどの評価が行なわれ、次に実際にストレッサーに対する何らかの対処が行なわれる。そして、その結果として、さまざまな種類のストレス反応が表出すると考えられている。

非行傾向のある子どもとの面接場面では、日常生活の中のストレッサーとして、学業の遅れ、先生や親といった大人との葛藤が報告されることが多い。非行少年を対象としたストレス研究はあまり多くないが、ストレスと非行になんらかの関係があるならば、非行の意味を解明するにあたって、それは有意義である(藤野, 1996)。

抑うつは、非行少年の間で最もよくある気分の障害である(Goldstein, Olubadewo, Ridding, & Lrxcen, 2005)。小保方・無藤(2005)では、中学生の非行傾向行為と抑うつの関連を検討し、非行には、抑うつが関連するタイプと、関連しないタイプが見られることを示し、非行傾向行為の経験のある子どもの中にも臨床的に抑うつと認められる子どもがいることを明らかにしている。また、抑うつが関連している非行と、

キーワード：中学生、非行傾向行為、抑うつ、ストレッサー、コーピング

1 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科

2 白梅学園大学／お茶の水女子大学大学院人間文化研究科客員教授

していない非行の特徴の違いは、特に対人関係のもち方にあることを示している。非行の経験のある子どもを、ひとくくりにして検討するのではなく、抑うつの高さで分類して、各々の子どもについて検討することが必要である。

また、対人関係のもち方だけでなく、ストレスやストレスへの対処方略についても、非行の経験のある子どものうち、抑うつの高さによって、その特徴が異なると考えられる。本研究では、非行傾向のある子どもを抑うつの高さで分類し、ストレスとストレスに対する対処方略（コーピング）について検討することを第1の目的とする。非行傾向があり抑うつが高い子どもと、非行傾向があり抑うつが低い子どもは、各々どのようにストレスを感じており、どのような対処方略をとっているかを明らかにすることで、より一層の子どもの理解につながり、子どものタイプに応じた援助が可能になると考えられる。検討するストレスの変数として、非行少年から、日常生活のストレスとして、多く報告される「学業」「先生」「親」に対するストレスを取り上げる。

さらに、生活のストレスは抑うつも非行も予測する（Kim et al, 2003）。これまでストレスと抑うつ、非行との関連については、別々に検討されることが多く、直接の比較はなされていない。よって本研究では、日常生活のストレスが、非行傾向行為と、抑うつの高さに対して、どの程度影響を与えているのか、比較することを第2の目的とする。また、非行と抑うつは関連しており（Harrington et al, 1996; Young et al, 1995）、児童期、思春期は、成人と異なり、抑うつが、非行、攻撃性、非社会的行動といった形で表れることがある（大野, 2000）と指摘されていることから、「抑うつ」から「非行傾向行為」への道すがりがみられるかどうか、モデル設定時に「抑うつ」から「非行傾向行為」へのパスをひき、その因果関係を確認することにする。

岡田（2002）は、ストレスと、問題行動を媒介する変数として情動面の反応を取り入れている。つまり、情動面の反応は、ストレスによって、直接的に引き起こされる反応（新名, 1995）であり、程度の差はあるが、誰にでもほぼ自動的に生じる反応である。しかし、実際に、問題行動にまで至る生徒はごく一部である。ストレスと問題行動には何らかの関連があるとはいえ、ストレスが即、問題行動を引き起こしているわけではない。本研究では、「ストレス」から「非行」と「抑うつ」への関係については、直接

の因果関係ではなく、ストレスが、非行と抑うつの高さにどの程度影響を与えているのか、検討することにする。

## 方法

1. 調査対象 東京都内の公立中学校6校の1～3年生を調査対象とした。分析対象は全調査対象のうち無回答の項目が質問項目の3分の1以上あるものや、回答内容に不備のあったものなどを除いた2743人分のデータ（1年生男子515名、女子428名、2年生男子459名、女子479名、性別不明6名、3年生男子444名、女子408名、性別不明4名）であった。

2. 調査手続き 2004年12月に質問紙調査を行った。質問紙、実施方法の説明を学校に郵送し、担任教師によるクラスごとの実施を依頼した。回答内容の秘密を保持するために調査票とともに封筒を配布した。対象者は調査票を記入した後、各自で調査票を封筒に入れ、厳封した上で提出した。なお、回収率は90%であった。

### 3. 調査内容

(1) 非行傾向行為の経験の有無に関する項目（8項目）  
非行傾向行為の項目内容は、小保方・無藤（2005）から6項目引用し、さらに、2項目追加した。小保方（印刷中）の非行傾向行為の項目内容は、秦（2000）の調査で、中学生の経験率で10%程度以上みられるものを参考にして作成されたものである。項目内容は、Table 3に示した。各項目について「あなたは、次のことをしたことがありますか」という指示に対し「ない」「ある」の2件法で回答を求め、経験が「ある」と回答した子どもには「あなたはこの1年間で次のことをしたことがありますか」との指示で各項目についてその有無を尋ねた。分析を行う際には「この1年間で経験のある子ども」を対象とした。

(2) 抑うつ傾向（10項目）

Child Depression Self-rating Scale (CDSS, Birmleson, 1981) の日本語版18項目から10項目抜き出したものを用いた。10項目の選定は小保方・無藤（2005）の調査（15項目）を参考にして、小保方・無藤（2005）で因子付加量の高いものから、10項目を抜き出した。小保方・無藤（2005）における15項目の選定は、菅原ら（2002）の論文を参考にし、菅原ら（2002）で、第1主成分への負荷が0.3以下であった3項目を除外して作成している。「いつもそうだ」「ときどきそうだ」

「そんなことはない」の3件法である。菅原ら(2002)の調査(15項目)では $\alpha=.78$ で、小保方・無藤(2005)の調査で、 $\alpha=.78$ である。抑うつ症状が高頻度に見られる場合に高い評定値を与え総合得点が高いほど抑うつ重症度が高いと判断する。

### (3) ストレッサー尺度

学業ストレッサー、先生ストレッサー、親ストレッサーを設定した。学業ストレッサーは、中学生用学校ストレッサー測定尺度(三浦, 2002)の学業ストレッサーから、4項目抜き出し、さらに1項目加筆修正をした。加筆した項目は「授業の内容がわからなかった」である。先生ストレッサーは、中学校用学校ストレッサー測定尺度(三浦, 2002)の先生ストレッサーから、5項目抜き出した。親ストレッサーについては、先生ストレッサーと全ての項目が対応しており、先生ストレッサーの「先生」の部分「親」に置き換えた。経験頻度「どのくらいあったのか」について「よくあった」「ときどきあった」「あまりなかった」「よくあった」の4件法で回答を求め、さらに、嫌悪性「どのくらい嫌だったのか」について、「とても嫌だった」「かなり嫌だった」「あまり嫌でなかった」「ぜんぜん嫌でなかった」の4件法で回答を求めた。経験頻度と嫌悪性を掛け合わせた得点を、それぞれのストレッサー得点とする。

### (4) コーピング尺度

中学生用コーピング測定尺度(三浦, 2002)の30項

のうち、3つの下位尺度(積極的対処、サポート希求、逃避・回避的対処)からそれぞれ偏りのないように、因子付加量の高い順に5項目ずつ抜き出した。

なお、評定尺度は(1)、(2)を除き全て4件法である。統計ソフトはSPSS11.5Jを使用した。

## 4. 合成変数の作成

調査で使用した各項目の因子構造を明らかにするために、各項目の粗点に基づいて、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。(1)非行傾向行為は「ない」、「ある」の0、1のカテゴリカルデータであるため等質性分析を行った。

### (1) 非行傾向行為

等質性分析を行った。カテゴリ数量化の値が第1次元で、「ない」が、.08~.28であり、「ある」が-3.40~-1.41であったので、それぞれのカテゴリで等質性が確認された。よって、本尺度は1因子構造であると見なした。項目の粗点を合計したものを、各因子の個人得点として算出し以降の分析が行われた。 $\alpha=.75$ であった。

### (2) 抑うつ傾向

第1因子の寄与率が比較的高い値を示しており(30.33%)、因子負荷量は.37~.63であり本尺度は1因子構造であると見なした。 $\alpha=.81$ であった。

### (3) ストレッサー尺度

固有値1以上の基準を設け3因子が抽出された。先

Table 1 ストレッサー尺度の因子分析結果

	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
先生や両親から期待されるような成績がとれなかった	0.66	0.15	0.21	0.43
人が簡単にできる問題でも自分にはできなかった	0.63	0.21	0.20	0.40
試験や成績の結果が悪かった	0.80	0.14	0.21	0.65
授業の内容がわからなかった	0.59	0.30	0.24	0.37
一生懸命勉強しているのに成績がのびなかった	0.53	0.18	0.23	0.29
先生から無視をされた	0.20	0.67	0.38	0.45
先生がえこひいきをした	0.19	0.73	0.34	0.54
先生から、自分と他人を比べるような言い方をされた	0.25	0.77	0.40	0.59
自分は悪くないのに、先生からしかられたり注意されたりした	0.21	0.72	0.37	0.52
先生が自分を理解してくれなかった	0.22	0.76	0.43	0.59
親から無視された	0.22	0.44	0.69	0.48
親がえこひいきをした	0.18	0.36	0.68	0.46
親から、自分と他人を比べるような言い方をされた	0.27	0.31	0.68	0.46
自分は悪くないのに、親からしかられたり注意されたりした	0.25	0.36	0.72	0.51
親が自分を理解してくれなかった	0.23	0.38	0.75	0.56
因子寄与率	29.56	11.09	8.02	
因子間相関	第1因子	0.52	0.28	
	第2因子		0.32	

Table 2 コーピング尺度の因子分析結果

	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
問題の原因をとりのぞくよう努力する	0.85	0.35	-0.24	0.73
現在の状況を変えるよう努力する	0.83	0.35	-0.24	0.69
自分自身の何かを変えるよう努力する	0.73	0.37	-0.22	0.53
どうしたらよいか考える	0.61	0.38	-0.19	0.39
問題を整理する	0.58	0.38	-0.14	0.35
人に問題の解決に協力してもらうようたのむ	0.32	0.77	0.07	0.53
人に問題の解決に役立つじょげんをもとめる	0.36	0.73	0.09	0.60
自分の気持ちを人にわかってもらう	0.40	0.69	0.01	0.48
自分のおかれた状況を人に聞いてもらう	0.38	0.67	0.06	0.46
問題を解決するために、人にえんじょしてくれるようたのむ	0.29	0.67	0.10	0.45
どうしようもないのであきらめる	-0.33	0.03	0.73	0.55
時のすぎるのにまかせる	-0.17	0.07	0.71	0.51
どうにでもなれと思う	-0.21	0.03	0.65	0.43
これでもかまわないとなつとくする	-0.14	0.10	0.63	0.40
現在の状況についてあまり考えないことにする	-0.12	0.11	0.58	0.34
因子寄与率	26.50	16.39	6.70	
因子間相関	第1因子 第2因子	0.48	0.13 0.10	

行研究と同様に、第1因子を「学業ストレス」、第2因子を「先生ストレス」、第3因子を「親ストレス」とした (Table 1)。信頼性係数は、それぞれ、 $\alpha = .77$ 、 $\alpha = .85$ 、 $\alpha = .82$ であった。

#### (4) コーピング尺度

固有値1以上の基準を設け3因子が抽出された。先行研究と同様に、第1因子を「積極的対処」、第2因子を「サポート希求」、第3因子を「逃避・回避的対処」とした (Table 2)。信頼性係数は、それぞれ $\alpha = .84$ 、 $\alpha = .83$ 、 $\alpha = .79$ であった。

なお(1)、(2)以外の尺度では項目の粗点を合計したものを項目数で割ったものを、各因子の個人得点として算出し、以降の分析が行われた。

## 結果

### 1. 非行傾向行為の経験者

この1年間の経験について「ある」と答えた者の人数と割合を、Table 3に示した。

Table 3 非行傾向行為の経験の「有り」の人数と% (性別、学年別)

		1年		2年		3年	
		男	女	男	女	男	女
タバコをすう	度数	7	18	26	31	24	33
	%	1.4	4.2	5.7	6.5	5.5	8.1
病気などの理由がないのに学校をさぼる	度数	28	33	46	76	28	43
	%	5.5	7.9	10.2	16.1	6.4	10.7
親にかくれて酒やビールを飲む	度数	9	11	26	51	41	55
	%	1.8	2.6	5.7	10.7	9.4	13.6
子どもだけで夜おそくまで街の中で遊ぶ	度数	51	53	79	94	79	94
	%	10.2	12.6	17.5	20.0	18.3	23.5
店の品物をお金を払わずにもってくる	度数	7	9	33	21	23	24
	%	1.4	2.1	7.3	4.4	5.3	6.0
よその人の自転車を盗んだり、かっぺに使用したりする	度数	7	6	31	11	20	20
	%	1.4	1.4	6.9	2.3	4.6	4.9
家のお金を親にだまって持ち出す	度数	22	20	27	39	27	30
	%	4.4	4.7	5.9	8.3	6.2	7.4
親の許可なく外泊する	度数	8	8	16	16	14	12
	%	1.6	1.9	3.5	3.4	3.2	3.0

## 2. 抑うつの得点

本研究で使用している抑うつ尺度 (CDSS) は、うつ病のスクリーニング尺度として開発されたものである。臨床的な介入が必要とされる重症度に近い抑うつ群の特徴を知るために、CDSSによるうつ病診断の判別点(カットオフポイント)は、15項目では14点をカットオフポイントとしている先行研究(菅原ら, 2002)を参照し、10項目では、9点以上の子どもの抑うつが高い群とした。抑うつ高群が687名(25.5%)、抑うつ低群が1887名(74.5%)である。

## 3. 非行傾向行為と抑うつ傾向のタイプによる検討

**群分け** 非行傾向行為の経験があり抑うつ傾向の得点が高い子どもと、非行傾向行為の経験があり抑うつ傾向の得点が低い子どもを比較するために、非行傾向行為の有無×抑うつ傾向の得点の高低で4群に分類した。まず、非行傾向行為について、この1年間で全く経験のない子どもを「非行無し群」、1つ以上経験のある子どもを「非行有り群」に分類した。次に、抑うつ傾向について、9点を基準に、8点以下を「うつ低群」、10点以上を「うつ高群」とした。

非行うつタイプ:「非行無し群」で「うつ低群」を「非行無しうつ低群」、「非行無し群」で「うつ高群」を「非行無しうつ高群」、「非行有り群」で「うつ低群」を「非行有りうつ低群」、「非行有り群」で「うつ高群」を「非行有りうつ高群」とした。

ストレスサー「学業ストレスサー」「先生ストレスサー」「親ストレスサー」と、コーピング「積極的対処」「サポート希求」「逃避・回避的対処」の各合成変数について、性、学年、非行うつタイプによる3元配置の分散分析を行った。平均点分類の4群と、臨床的分類の4群でそれぞれ分析を行った。有意な差がみられた場合には、多重比較を行った。その際、等分散性が仮定できた場合はTukey法を、等分散性が仮定できなかった場合はDunnett T 3法を採用した。「非行無しうつ低群」1469名、「非行無しうつ高群」386名、「非行有りうつ低群」430名、「非行有りうつ高群」246名である。「非行うつタイプ」で、主効果がみられた場合にのみ言及する。結果はTable 4に示すとおりであった。

### (1) 学業ストレスサー

非行うつタイプによる主効果がみられた ( $F(6, 2393) = 21.049, p < .001$ )。多重比較の結果、「非行無しうつ低群 < 非行有りうつ低群、非行無しうつ高群、非行有りうつ高群」であった。

### (2) 先生ストレスサー

性別×非行うつタイプの交互作用がみられた ( $F(6, 2405) = 3.051, p < .001$ ) ので、性別に、非行うつタイプの分散分析を行った。男女ともに、非行うつタイプ的主効果がみられた(男子  $F(3, 1244) = 13.910, p < .001$ ; 女子  $F(3, 1161) = 40.296, p < .001$ )。多重比較の結果は、男子では、「非行無しうつ低群 < 非行無しうつ高群、非行有りうつ低群 < 非行有りうつ高群」であった。女子では、「非行無しうつ低群 < 非行無しうつ高群 < 非行有りうつ低群、非行有りうつ高群」であった。全体の傾向としては、「非行無しうつ低群 < 非行無しうつ高群 < 非行有りうつ低群 < 非行有りうつ高群」であった。

### (3) 親ストレスサー

非行うつタイプの主効果がみられた ( $F(6, 2424) = 52.187, p < .001$ )。多重比較の結果、「非行無しうつ低群 < 非行有りうつ低群 < 非行無しうつ高群 < 非行有りうつ高群」であった。

### (4) 積極的対処

非行うつタイプ的主効果がみられた ( $F(6, 2465) = 5217.512, p < .001$ )。多重比較の結果、「非行有りうつ高群 < 非行無しうつ低群、非行有りうつ低群」であり、「非行無しうつ高群 < 非行無しうつ低群」であった。

### (5) サポート希求

非行うつタイプ的主効果がみられた ( $F(6, 2466) = 9.657, p < .001$ )。多重比較の結果、「非行無しうつ高群、非行有りうつ高群 < 非行有りうつ低群」であった。

Table 4 各合成変数の平均値、標準偏差

		非行なし		非行あり	
		うつ低群	うつ低群	うつ高群	うつ高群
学業ストレスサー	平均	2.07	2.34	2.51	2.65
	SD	0.67	0.74	0.76	0.79
	N	1427	413	377	237
先生ストレスサー	平均	4.41	7.24	6.35	9.95
	SD	7.56	9.63	9.09	10.31
	N	752	230	175	88
先生ストレスサー	平均	3.81	9.31	6.56	10.64
	SD	5.97	9.84	8.38	10.14
	N	653	176	189	143
親ストレスサー	平均	4.05	5.96	8.29	10.73
	SD	6.40	8.01	9.38	10.62
	N	1427	408	367	223
積極的対処	平均	2.82	2.76	2.66	2.57
	SD	0.68	0.75	0.71	0.77
	N	1427	420	381	238
サポート希求	平均	2.27	2.37	2.19	2.16
	SD	0.72	0.80	0.81	0.81
	N	1431	419	378	239
逃避・回避的対処	平均	2.07	2.34	2.51	2.65
	SD	0.67	0.74	0.76	0.79
	N	1427	413	377	237

(6) 逃避・回避的対処

非行うつタイプの主効果がみられた ( $F(6, 2453) = 65.381, p < .001$ )。多重比較の結果、「非行無しうつ低群 < 非行有りうつ低群 < 非行無しうつ高群、非行有りうつ高群」であった。

4. 「ストレッサー」から「非行傾向行為」と「抑うつ」への影響力の比較

ストレッサーから「非行傾向行為」と「抑うつ」に対する影響の大きさの性、学年による比較を行うために、共分散構造分析を用いて性別、学年ごとの6集団による多母集団比較を行った。

因果モデルの設定 「ストレッサー」から「非行傾向行為」、「抑うつ」へパスをひいた。また、「抑うつ」から「非行傾向行為」へパスをひいた。

構成概念に対応する観測変数についてTable 5に示した。「ストレッサー」は、「学業ストレッサー」「親ストレッサー」「先生ストレッサー」のそれぞれの合成変数を観測変数として用いた。「非行傾向行為」は、項目変数を観測変数として用いた。「抑うつ」は、項目変数が10項目と多いため、より潜在変数の特性を表してい

Table 5 構成概念に対応する観測変数

構成概念	観測変数 (項目数)	
ストレッサー	X1 学業ストレッサー (3)	
	X2 先生ストレッサー (3)	
	X3 親ストレッサー (3)	
非行傾向行為	X4 タバコをすう	
	X5 病気などの理由がないのに学校をさぼる	
	X6 親にかくれて酒やビールを飲む	
	X7 子どもだけで夜おそくまで街の中で遊ぶ	
	X8 店の品物をお金を払わずにもってくる	
	X9 よその人の自転車を盗んだり、かっけて使ったりする	
	X10 家のお金を親にだまって持ち出す	
	X11 親の許可なく外泊する	
	抑うつ	X12 とても悲しい気がする
		X13 にげだしたいような気がする
X14 ひとりぼっちの気がする		
X15 なきたいような気がする		
X16 生きていてもしかたがないと思う		

Table 6 モデル1、2の適合度指標

	モデル1	モデル2
GFI	0.917	0.92
AGFI	0.902	0.902
CFI	0.862	0.866
RMSEA	0.026	0.026
AIC	2224.859	2207.126
BCC	22235.03	2218.468
自由度	686	671

ると考えられる、因子分析で寄与率の高かった上位5項目を観測変数として用いた。

各々のパラメータの大きさに、性、学年によって差がないとするモデル(モデル1)と、差があるモデル(モデル2)を設定した。モデル1には、「ストレッサー」から「非行傾向行為」と「抑うつ」、「抑うつ」から「非行傾向行為」に対するパラメータに等値制約を課し、モデル2には等値制約を課さなかった。また各モデルに、因子の等質性を確認するため、構成概念から観測変数へのパラメータに等値制約を課した。因子の等質性は、適合度が高かったため確認された。モデル1とモデル2を比較した結果、AIC、BCCの値から、モデル2が当てはまりがよいことが示され、パラメータには、学年、性によって差がみられることが明らかになった (Table 6)。

以下に、適合度が高く有意に当てはまりのよかったモデル2の分析結果を示す。モデル2の分析における適合度指標 (Goodness of Fit Index; GFI) の値は.92、修正適合度指標 (Adjusted Goodness of Fit Index; AGFI) の値は.90、Root Mean Square Error of Approximation (RMSEA) の値は.026であった。従って、モデルとデータの適合度は高く、構成されたモデルは標本共分散行列をよく説明していると判断される。Figure 1、Figure 2は、検討した因果関係を共分散構造モデルによって分析した結果であり、解釈を容易にするために単方向の矢印に標準化された因果係数を示した。男子の結果をFigure 1に、女子の結果をFigure 2に示した。Figure 1、Figure 2は上段に1年生の値を、中段に2年生の値を、下段に3年生の値を示した。

男子1年では、「ストレッサー」から「抑うつ」へのパス係数は.41であった。「ストレッサー」から「非行傾向行為」へのパス係数は.10でありこちらはパスをひけなかった。

男子2年では、「ストレッサー」から「非行傾向行為」へのパス係数は.25であり、「抑うつ」へのパス係数は.37であった。

男子3年では、「ストレッサー」から「非行傾向行為」へのパス係数は.26であり、「抑うつ」へのパス係数は.40であった。男子では、全学年で「非行傾向行為」よりも「抑うつ」のほうが、「ストレッサー」からの影響力が大きいことが示された。また、「抑うつ」から「非行傾向行為」へのパス係数は全学年でいずれもパスをひくことはできなかった。

学年で、「ストレッサー」から「非行傾向行為」への

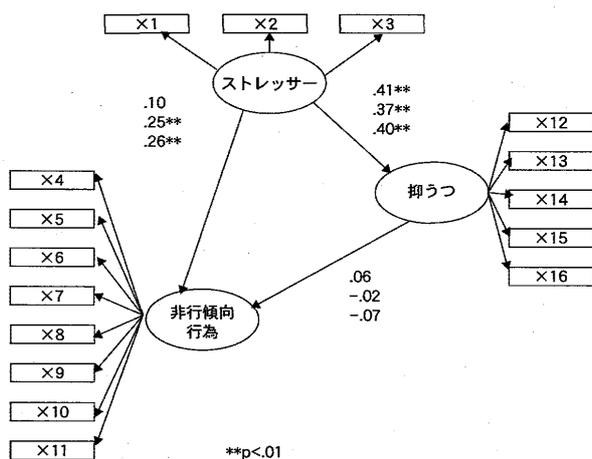


Figure 1

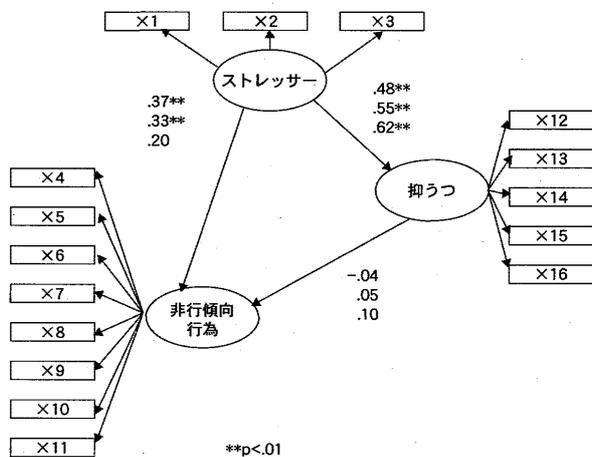


Figure 2

パス係数を比較すると、1年生より2年生、3年生の方が大きくなることが示された。

女子1年では、「ストレス」から「非行傾向行為」へのパス係数は.37であり、「抑うつ」へのパス係数は.48であった。

女子2年では、「ストレス」から「非行傾向行為」へのパス係数は.33であり、「抑うつ」へのパス係数は.55であった。

女子3年では、「ストレス」から「抑うつ」へのパス係数は.62であった。また、「ストレス」から「非行傾向行為」へのパス係数は.20であり、こちらはパスを引くことはできなかった。

男子と同様に、女子でも、全学年で「非行傾向行為」よりも「抑うつ」のほうが、「ストレス」からの影響力が大きいことが示された。また、「抑うつ」から「非行傾向行為」へのパス係数は全学年でいずれもパスをひくことはできなかった。

学年で、「ストレス」から「非行傾向行為」へのパス係数を比較すると、3年生より1年生、2年生の方が大きいことが示された。

## 考察

### 非行傾向行為の抑うつの高さによるタイプごとの特徴

#### 1. ストレス

非行傾向行為の経験があり、抑うつが高い子どもと、非行傾向行為の経験があり抑うつが低い子どものそれぞれの特徴について、中学生の日常生活におけるストレスである、学業ストレス、先生ストレス、親ストレスから明らかにした。

学業ストレスは、「非行有りうつ高群」と「非行有りうつ低群」の間に差はみられず、非行傾向行為の経験のある子どものうち、抑うつの高さで差がみられないことが明らかになった。また、学業ストレスは、「非行無しうつ低群」より、「非行有りうつ低群」「非行無しうつ高群」の方が高かった。抑うつが高い子どもだけでなく、非行のある子どもも学業ストレスが高いといえる。

先生ストレスは、女子では、「非行有りうつ高群」と「非行有りうつ低群」の間に差はみられなかった。男子では、「非行有りうつ高群」の方が「非行有りうつ低群」より先生ストレスが高かった。非行の経験があり抑うつも高い、という2つの問題を抱えている子どもが先生ストレスを最も強く感じているといえる。

全体的な傾向は、「非行無しうつ低群<非行無しうつ高群<非行有りうつ低群<非行有りうつ高群」であり、非行の経験のある子どもの方が先生ストレスを強く感じていることがわかった。特に、女子は、「非行無しうつ低群<非行無しうつ高群<非行有りうつ低群、非行有りうつ高群」であることから、女子で非行の経験がある子どもは、先生ストレスを強く感じることが明らかになった。非行の経験のある子どもの方が、抑うつの高さに関わらず、先生に無視された、えこひいきされた、理解してもらえなかった、悪くないのに注意されたという不公平感や、理解してもらえないという思いを強く抱いているといえる。

親ストレスは、「非行有りうつ高群」の方が「非行有りうつ低群」より高いことが明らかになった。また、「非行無しうつ低群<非行有りうつ低群<非行無しうつ高群<非行有りうつ高群」であることから、親ストレスは、非行の経験の有無、抑うつの高さの両方で差がみられるが、抑うつが高い子どもの方が、

非行の経験がある子どもよりも親ストレスを強く感じているといえる。また、非行の経験があり、抑うつが高いという2つの問題を抱えている子どもが最も親ストレスを強く感じていることが明らかになった。

学業ストレス、先生ストレス、親ストレスといった日常生活のストレスは、非行と抑うつの方と関連しているといえる。生活のストレスは、抑うつや不安などのinternalizingの問題にも、非行といったexternalizingの問題にも影響を与えているが、さらに、internalizingの問題、externalizingの問題が、その後のライフストレスを増加させる (Kim et al, 2002) ことから、親子関係などは、非行や抑うつに影響を与えているが、非行と抑うつがあることがまた、家庭内の葛藤を増幅させている可能性もあるだろう。

## 2. コーピング

次に、ストレスに対する対処方略であるコーピングについて検討を行なった。積極的対処は、「非行有りうつ高群<非行無しうつ低群、非行有りうつ低群」であった。「非行有りうつ低群」は「非行有りうつ高群」よりストレスに対し、積極的な対処をしていることが明らかになった。非行の経験があっても抑うつが低い子どもは、問題を整理したり、問題の原因をとりぞくように努力したりなど、問題に対し積極的に対処をしている。

サポート希求は、「非行無しうつ高群、非行有りうつ高群<非行有りうつ低群」であった。「非行有りうつ低群」は「非行有りうつ高群」より、サポート希求が高く、ストレスに対する対処方略として、他人に問題の解決に協力してくれるように頼んだり、助言を求めたりしている。「非行有りうつ低群」の方が、「非行有りうつ高群」より、対人関係を築くことができ (小保方・無藤, 2005)、対人スキルが「非行有り高群」よりも高いことも関連しているだろう。

「非行有りうつ低群」の方が、「非行有りうつ高群」が、ストレスに対して、積極的に対処をしたり、他人にサポートを求めることが多いが、そのために抑うつが低い可能性もある。本研究は、「非行有りうつ低群」「非行有りうつ高群」それぞれの特徴を検討したため、影響の方向性は明らかにできていない。本研究の限界である。

逃避・回避的対処は、「非行無しうつ低群<非行有りうつ低群<非行無しうつ高群、非行有りうつ高群」であった。「非行有りうつ高群」が、「非行無しうつ低群」より、ストレスに対して逃避・回避的対処方略を

取っていることが明らかになった。非行少年は、ストレスや問題に対して、逃避・回避的に行動していると捉えられやすいが、それは、抑うつの高さにより異なることが明らかになった。

ストレス、コーピングの多くの要因で、非行傾向行為の経験のある子どものうち、抑うつの高さで、その特徴に違いがあることが明らかになった。

## ストレスから非行、抑うつへの影響

ストレスは、「非行傾向行為」と「抑うつ」の各々に対し、どの程度影響があるのか、学年、性別の6集団に分けて比較した。まず、モデルの比較から、各々のパラメータは、性、学年によって差があることが明らかになった。

得られたパスを見ると、全集団で、「ストレス」からの影響の強さは、「非行傾向行為」よりも「抑うつ」の方が強いことが明らかになった。中学生の日常生活のストレスは、「非行傾向行為」より「抑うつ」に対しての影響力が大きいといえる。

性別による比較を行うと、「ストレス」から「抑うつ」に対する影響力は、男子と比較し、女子の方が強いことが明らかになった。思春期において、抑うつは性差がみられ、女子の方が抑うつの高い子どもが多いことから、ストレスから抑うつへの影響力は女子の方が強いと考えられる。

また、「ストレス」から、「非行傾向行為」の影響力は、1年生男子と、3年生女子が、他の集団と比較し弱いことが明らかになった。

全集団において、「抑うつ→非行傾向行為」へのパス係数が有意ではなかった。よって、抑うつと非行の関連については、因果関係ではないといえる。だが、非行傾向行為があり抑うつがある子どもがいることから、非行傾向行為の経験のある子どもで、抑うつが高い子どもというように、組み合わせの中で出現するものとして考えられるだろう。

## 文献

- Birleson, P. (1981). The validity of depressive disorder in childhood and development of a self-rating scale: A research report. *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, 22, 73-88.
- 藤野京子. (1996). 非行少年のストレスについて. *教育心理学研究*, 44, 278-286.

- 秦 政春. (2000). 子どもたちの規範意識と非行・問題行動. 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, 26, 123-155.
- Harrington, R., Rutter, M., & Forbonne, E. (1996). Developmental pathways in depression: Multiple meanings antecedents and end points. *Developmental Psychopathology*, 8, 601-616.
- Kim, K.J., Conger, R. D., Elder, G.H.O., & Lorenz, F. O. (2003). Reciprocal influence between stressful life events and adolescent internalizing and externalizing problems. *Child Development*, 74, 127-149.
- Lazarus, R. S. & Folkman, S. (1984). Stress, appraisal, and coping. New York: Springer Publishing Company.
- 緑川 徹. (1999). 初発型非行—豊かさが生み出す浮遊非行—. 清永賢二 (編), 少年非行の世界. pp, 36-65. 有斐閣.
- 三浦正江. (2002). 中学生の日常生活における心理的ストレスに関する研究. 風間書房.
- 新名理恵. (1995). 介護の心理的ストレス・モデル. *ストレス科学*, 10, 121-139.
- 小保方晶子・無藤 隆. (2005). 中学生の非行傾向行為と抑うつ傾向との関連. *心理臨床学研究*, 23, 533-545.
- 岡田佳子. (2002). 中学生の心理的ストレス・プロセスに関する研究: 二次的反応の生起についての検討. *教育心理学研究*, 50, 193-203.
- 大野裕. (2002). 「うつ」を治す. PHP新書.
- 菅原ますみ・八木下暁子・詫摩紀子・小泉智恵・瀬地山葉矢・菅原健介・北村俊則. (2002). 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連: 家族機能および両親の養育態度を媒介として. *教育心理学研究*, 50, 129-140.
- Young, S. E., Mikulich, S. K., Goodwin, M. B., Hardy, J., Martin, C. L., Zoccolillo, M. S., & Crowley, T. J. (1995). Treated delinquent boy's substance use: onset, pattern, relationship to conduct and mood disorders *Drug and Alcohol Dependence*, 37, 149-162.